

## 唯物論の立場

加藤 正

これは『前衛』第二二号の原光雄君の論文にうごかされて書いたものである。

その昔、デボーリンがレーニンの哲学主著を紹介した『戦闘的唯物論者レーニン』というパンフレットを書いた。大正の末年に、これが若き日の志賀氏によつてほんやくされ、われわれ入門者はやけつくように読みいったものだ。いまではこの本もデボーリンの他の本と同じく落第の書となつてゐるが、その中にこんなことが書いてある。いわく、プレハノフは『マルクス主義の根本問題』の中でフォイエルバッハは「実践的批判的活動」を理解してゐないという見解をとつていたが、レーニンはその翌年の哲学主著の中でフォイエルバッハはマルクス・エンゲルスと同じく認識論の根本問題において実践にうつつたえ、人間的実践の全体の経験を認識論のきそにおいたという見解をとつてゐる。その後プレハノフはレーニンにならつて見解をあらため、実践活動から切りはなされた哲学理論が無意味だということはフォイエルバッハ哲学の精神であるとのべた。うんぬん。

これを読んで、すぐおかしいと思うのは、それならばマルクス自身が『フォイエルバッハについて』の第一テーゼで、彼は実践的批判的活動の意義をつかんでいないと評したのは見当ちがいだつたのかということである。もしそうなら、マルクスこそが実践的批判的、すなわち変革的な活動の意義をつかんだということ、したがつてまたマルクスがはじめて共産主義の本質をあきらかにしたということとはでたらめなのか。レーニンはフォイエルバッハをすくうためにマルクスをくつがえしたのか、ということになる。

まちがいのもとはどこにあったか。第一テーゼの読<sup>よ</sup>みちがいにある。第一テーゼは、フョイエルバッハのもふくめてマルクス以前の唯物論はみな人間活動の対象（自然）のみを認識対象としていて、人間活動そのものが唯物論的な認識の対象となっていないという点をついているのだ。人間活動をも対象（現実性・感性）としてつかむこともっとくわしくいえば、これまでの対象（自然）の中へ人間活動をもふくめ、人間活動をそれと関係づけ、人間活動を産業および社会関係の全体としてとらえ、その変革の条件をあきらかにすること、唯物論はそこまですすまなければならぬ。これが第一テーゼの眼目である。つまり史的唯物論の原理がここにのべてあるのだ。これについては、昔くわしく論じたことがあるので、今はこれくらいにしておく。

これをプレハノフはどう読<sup>よ</sup>みちがえたか。彼は「対象を客観または直観の形でのみとらえ、感性的な人間活動として（すなわち主観的に）とらえず、したがって活動の方面は観念論にゆだねた」とある言葉の意味がよくわからなくて、これは認識論の話だと想像した。いわく、客観が主観に作用して認識がおこなわれるというのがフョイエルバッハまでの唯物論、これに対して、主観が客観にはたらきかけて認識がおこなわれるというのがマルクスの唯物論。つまり、認識における人間活動（実践）の意義をつかむことが第一テーゼの眼目だと。ところが、ほんのこの点をいうと、実践を基準とする認識論をとるのはすべての唯物論に共通であって、この点ではレーニンの言うようにフョイエルバッハとマルクスとの間になんのちがいもない。フョイエルバッハに欠けていたのは、「認識における実践の意義の理解」ではなくて、「社会関係をつくりあげ、それを変えてゆく人間の活動をそのままに認識すること」である。唯物史観（および共産主義）の原理である。プレハノフはテーゼを読みちがえて、何もかもわからなくしてしまったのである。

しかしながら、誤ったのはプレハノフばかりではない。われわれの間で第一テーゼを実践をきそとする認識論の説明とうけとり、それがマルクス以前の唯物論の認識論とはまったくちがうように宣伝これつとめたのは、なかん

づく永田広志君とその一派である（たとえば『唯物論哲学のために』の中の「唯物弁証法と史的唯物論」の三をみよ）。永田君らは、さらにすすんで実践と実践の認識（すなわち史的唯物論）とをすりかえ、実践にもとづく認識論を史的唯物論にもとづく認識論にかえてしまった。なるほど、史的唯物論はマルクスにはじまるから、それにもとづく認識論はマルクス以前にはなかったものにはない。かくて、階級闘争や共産党活動の理解をきそとする認識論がつくられ、こういう認識論で認識を加工し指導するプログラムが（むなしく）立てられた。

レーニンがその哲学主著の第二章の六で、実践を基準とする認識論を説明し、実践の確認するものをとおして真理を認識するのが唯物論だとのべたとき、それがマルクスの考であることかんがえを示すために『フォイエルバッハについて』の第二テーゼをあげ、フォイエルバッハも同じ立場だと説明している。第一テーゼはあげていない。フォイエルバッハの欠陥をついた第一テーゼがもしも実践をきそとするマルクス主義の認識論の証明書だとしたら、マルクスとフォイエルバッハを同列においたレーニンはまゆつばものだけということになる。

昭和のはじめといえば、われわれの頭が多かれ少かれ福本イズムに感染し、マルクス主義に特有な「プロレタリア的認識論」を信奉していた頃だが、ちょうどそのときレーニンの哲学主著のほんやくが出て、われわれはみなむさぼるように読んだ。そしてわれわれは——いや、少くとも私はだ——レーニンがマルクス主義独自の認識論を強調し説教することをせず、デイドロもフォイエルバッハもマルクスも、はなはだしきにいたっては（と私は思ったのだが）ヘッケルまでもいっしょくたにして、唯物論一般の戦列をしていることに何かわりきれぬものを感じた。そもそも『唯物論と経験批判論』という題名からして物足りない。唯物論なにするものぞ。プロレタリア認識論としての弁証法的唯物論をさしおいて、単なる唯物論にいまさらなんの意義ありや。と、まア誇張していえば、心の一方にそんなふうな感じをいっていた。

けれども、ほんとはレーニンのやり方が正しいのであって、われわれのとるべき認識論的立場は、実践を基準と

する唯物論という点では、デイドロ、フオイエルバッハと同じなのである。デイドロはダランベールとの対話の中で、われわれは三段論法や推理をやるのではなくて、経験が示す現象の連結を告げるのみだと言っている。実践にもとづく認識は、もつとくわしくいうと、頭の中で考えるだけでなく、目をうごかし、手をはたらかせ、実際に対象にあたってみて、あるいはまた産業や交易の仲立ちによって、現実の上に実証される関係をとらえてゆくということである。この場合、実践の機能は思考の前に実証的事実とその関連を開き出してゆくという形で発揮される。こうして時代から時代へと発展してゆく人類の総実践の経験が唯物論的認識を発展させるのである。エンゲルスは『フオイエルバッハ論』の四で、唯物論的立場とは、頭だけで考えた関係でなく、現実の上に指摘できる関係をたどって事実をつかむことだと説明し、マルクス主義もほかならぬその立場をとることをのべている。

この点では、くりかえして言うが、マルクス・レーニン主義の認識論的立場はそれ以前の唯物論や一般に自然科学がとっている立場とちつともちがわない。もし、ちがいがあるとすれば、それはこの認識論的立場そのものにあるのではなくて、この立場において何が認識されたかという点、すなわちマルクス主義が新しい対象、特に人間の歴史を、しかも歴史を将来に向って変革する条件をこの立場から認識したという点にある。このことをまちがってはいけない。エンゲルスは右の箇所につづけて、われわれはただこの唯物論的立場をあくまで堅持して、すべての方面へおしひろげたにすぎないとのべている。もつと平たく言いかえれば、近世科学がとってきた自然認識の立場を社会と歴史の認識へひろげたということだ。

原君（および同じ号の三田君）の引用したスターリンの説明は、それはそれとしてまた解説があるが、しかし以上のべたことからおよその理解はできると思う。いずれにしても史的唯物論を逆に唯物論的認識論のきそにすえて、その上でこの認識論を加工改良し、マルクス主義だけに特有な「実践的」認識論などをつくることは、マルクス主義のうらがえしである。つまり観念論化である。

こういう異論をはさむ人があるだろう。唯物論は唯物論でも弁証法的唯物論だ。これが以前の唯物論とマルクス主義の唯物論と立場のまったくちがう点だ。マルクス主義は「革命的な、実践的批判的な活動」を認識論のきそにおくため、弁証法的唯物論になるのだ。もつとつっこんでいえば、共産党の実践を認識論のきそにおくからだ。弁証法的唯物論は唯物史観（史的唯物論）の上ではじめて形成される、うんぬん。ところが、エンゲルスは唯物論が弁証法的になったのは実践（特殊な形態の「実践」でなく、あらゆる唯物論が認識の基準として知っている実践、自然および歴史についてのあらゆる経験を人類の思考のまえにもたらず実践、現実の諸関係を開き示す実践）の発展が対象の上に弁証法的関係を実証したからだ、つまりそういう関係が発見されたからだと説明している。『空想から科学へ』でも『フォイエルバッハ論』でもあけてみるとよい。エンゲルスはプロレタリアも、共産党の実践も、史的唯物論も、なんにも使わずに、ただの唯物論の立場で、言いかえると認識論を外から加工することなしに、唯物論そのものの本性から、唯物論が弁証法的になる道行きを示している。この点は大正末年に私が右の本を勉強しはじめたころ、福本イズムからエンゲルスの決定的あやまりと宣告されていたので、そのけつちやくをつけるのにずいぶんうなったものだった。（けつちやくの一端は『自然弁証法』をほんやくしたとき、序文にちよつと書いた。いまはもつとつっこんだことを書く時がきているが、ここではふれない。）

要するにエンゲルスが正しいのだ。弁証法は現象の関連の観察と発見にもとずいて生れてきた。そして、ギリシアの昔をいわずとも、それはまず自然認識からそだつてきた。自然認識が自然科学の形をとつて自然をばらばらに研究したときも、事実の中からしだいに弁証法をつくりあげた。ニュートンとリンネーは非弁証法の見本のようにいうが、それにしても前者は天体の運動と地上の運動とを関連づけて万有引力をあばき出し、作用と反作用の統一をあきらかにしたし、後者は植物の種が地図上の地点のようにあらゆる方向につながりを示しているところから、種の自然的な成群をひろいあげている。こういう芽がそだつて、形而上学的なわくがゆるみ、科学がうしおのよう

に現象の関連づけをおいはじめたとき、エンゲルスがヘーゲルの弁証法と自然現象の関連とのあいだに関係をつけた。そのころ、マルクスも経済現象の関連とヘーゲル弁証法とのあいだに関係をつけていた。どちらも一八五八年ごろである（『自然弁証法』解題）。思考の弁証法を唯物論的認識（実証科学）に調和させて行使するということは、意識的にはこのころから始まったとみてよい。これからも明かなように、唯物弁証法はいつでも自然および歴史の唯物論的な認識の中に現象それ自身の関連が明かになるにつれて、またそのかぎりでのみ、直接それにむすびついて問題となるのである。たんなる唯物論の上で問題になるのであって、それ以外に弁証法にとつても、それと唯物論との結びつきにとつても、なんらかの「背景」（たとえば史的唯物論、たとえば革命的実践）が伏在しているのではない。マルクスもエンゲルスもヘーゲル学徒として弁証法は知りぬいていた。しかし、一八四五年ごろ二人が史的唯物論をきざきあげたとき、ヘーゲルの弁証法的歴史哲学（法哲学もふくめて）はたえず念頭にあり、歴史の関連の把握をたすけたが、思考の弁証法をそれに調和させて行使するというころみはさしあたり見られない。ひたすら歴史の対象それ自身の弁証法的関連を実証的におうという行き方をしている。それは当時の自然科学が対象の弁証法的な関連をひたすら実証的におうていたのとよく似ている。これについては『ドイツ・イデオロギー』や『経済学批判』の序文などを参考にされるとよい。ところで、ヘーゲルの歴史哲学をたどってみると、ヘルダーあたりへさかのぼり、これはこれでまたカントの太陽系進化論やビュフォンの博物学の発展思想にみなもとをもち、歴史を自然のつづきとみている。したがって歴史を法則的な関連からみる弁証法的理解はもともと自然の弁証法的理解にねざすといえる。さてまた思考の弁証法、すなわち事実の弁証法に調和させて行使される弁証法的思考法則についていえば、ヘーゲルの論理学はカントが分析的に明かにした思考要素を手がかりとして思考の発展をたどったものだが、カントはカントでニュートン物理学においてもつとも古典的な精密な形でふくまれている思考様式をとり出したものである。弁証法的唯物論の歴史観が自然弁証法に先行しなければならぬいわれはどこにもない。

さいごに一つ二つ注意をのべる。一つは、右に唯物論も弁証法も自然認識からそだつて歴史認識へ延長されたと言ったが、それを原君が解したように、「史的唯物論は弁証法的唯物論を、したがってその核心としての自然弁証法を社会現象へ適用したもの」と考えてはいけない。「あきらかにスターリンはこのように規定づけ」ていない。われわれは自然弁証法（自然法則）を歴史へ適用するのではなく、思考の弁証法（思考法則）を唯物論的認識のあらゆる方面へ適用し、それぞれの方面で自然弁証法や史的弁証法（歴史的社会的法則）を具体的に発見するのである。弁証法が自然科学（唯物自然観、自然的唯物論）にどんなに深い根をもっているにもせよ、それが思考法則として取りあげられ、適用されるようになれば、それはそういうものとして唯物論的思考のあらゆる方面と直接にむすびついて深められるのである。自然認識では合目的な効果をもたらす要因が度外されて研究される場合が多い。したがってそれが問題になると、かえって歴史認識における考え方がヒントになることもある。昔の理科の学友杉田君が『理論』に自然行程の速度論のことを面白く紹介しているが、「隘路あいろとか時とかよく言われたが、実にわれわれにはピンとくる」と感想をもらしている。といつても、これは史的弁証法を自然弁証法に適用することではない。ダーウインはマルサスの人口論を無批判に生物界に適用してかえって進化論をそこねている。各個の現象領域はそれ自身の固有の法則についてつかまれねばならない。自然法則を一つのモメントとしてふくみながら歴史法則が理解されるということは、まずなによりも歴史が歴史として、その固有の弁証法において実証的に分析されねばならぬという唯物論的原則よりも上に立つことはできない。弁証法は思考法則として研究のあらゆる方面から直接に円満にきそづけられねばならない。一方的主導的にきそづけられるべきものではない。弁証法を思考法則として仕上げる仕事はレーニンも強調しているが、まだ十分まとまった成果があがっていないのでとかく混乱がおこりがちだ。そのいちじるしい例は他のきかいにふれよう。

つぎに、現在史的唯物論はひろく受けいれられているが、だからといってブルジョア・イデオロギーとの闘争の

重点を自然認識の分野へうつせとは言えない。ブルジョア社会では普及はかならず俗流化をとまなう。史的唯物論からはその眼目である「革命的、実践的批判的活動」の意義の把握がきえうせて、客観主義的なぎろんがはびこる。あらゆるイデオロギーに対して「人間実践と、この実践の（唯物論的）把握」（『フオイエルバッハについて』第八テーゼ）を対置させること、実践的批判的活動とその把握とを対置させること、その把握によってマルクス・レーニン主義党の目的意識的活動（レーニン『何をなすべきか』）を強化すること、これが大切だ。つまり史的唯物論が「党派的なものを含む」ところまでおしすすめなければならぬ。史的唯物論（歴史的社会的諸科学）をして、革命的行動の条件、現状の変革の条件そのものを把握するところまでみちびかねばならぬ。言いかえれば党綱領の科学を強化せねばならぬ。

理論の党派性ということは二つの方面から考えられる。ひとつは、唯物論的立場をあくまで堅持して、あらゆる方面へ一貫すること。認識論的立場の党派性は、エンゲルスにおいても、レーニン（哲学名著、第六章の四）においても、これ以外の意味では主張されていない。永田君一派は、この唯物論と観念論の認識論的二党派の対立が、現代社会の階級対立に、そのイデオロギー闘争に利用されている点から誤った結論をひき出し、認識論を史的唯物論や党派の実践できそづけ、それに特殊な形成をあたえることが、理論の党派性を高めることだと考えている。それは結局もうひとつの方面での党派性を観念化することになる。もうひとつの方面とは、革命的党派の実践をその固有の条件性において（つまり唯物論的に）認識しつつ、それを意識的にみちびくという現実の課題である。革命的実践は認識論上のカテゴリーではない。現実の対象的な活動だ。



- 『加藤正著作集』第二巻（「加藤正著作集」刊行委員会、一九九〇年十二月）所収。
- PDF化するにあたり、旧漢字は新漢字に、旧仮名遣いは新仮名遣いに改めた。
- 読みやすさのために、適宜振り仮名をつけた。
- PDF化には $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}_{2\epsilon}$ でタイプセッティングを行い、 $\text{dvi2pdfmx}$ を使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.ac.uk/~hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。